

ミュージアム・コンサート

N響メンバーによる室内楽

曲目解説

モーツァルト:フルート四重奏曲 第3番

宮廷楽団に職を求めてマンハイムに滞在していたモーツァルトが、裕福な医者でアマチュア・フルート奏者のフェルディナント・ドゥジャンのために書いた3つのフルート四重奏曲のうちの一つ。しかし、マンハイムで実際に作曲されたのはフルート四重奏曲第1番のみで、それ以外は別の機会に作られたという説もある。

比較的規模の大きな二つの楽章で構成される。第1楽章アレグロは、生みなぎる闊達なソナタ形式。第2楽章アンダンティーノは、主題と6つの変奏からなり、4つの楽器が魅力的な対話を繰り広げる。

父レオポルトと交わした手紙をもとに「モーツァルトはフルート嫌い」といった説も囁かれているが、この佳曲を聴く限りとうてい信じられない。

ルーセル:フルート三重奏曲

フランスの作曲家ルーセルは、海軍で軍務に就いたのち、音楽家を志したという異色の経歴の持ち主。世代的にはドビュッシーとラベルのあいだに位置する。

本曲は1929年の作品。第1楽章はソナタ形式で書かれ、弦楽器のリズミカルな伴奏に乗ってフルートが躍動する。第2楽章は緩徐楽章。フルートと弦楽器の絡みが緻密な対位法によって浮き彫りにされる。第3楽章はロンド形式。ヴァイオリン、チェロの多彩な奏法と相変わらず快調なフルート。途中、アンニュイな主題が現れたのち、最後はテンポをあげて終曲する。

ショスタコーヴィチ:弦楽四重奏曲 第7番

1960年に作曲された本曲は、作曲家が手がけた最初の短調クアルテットとなった。初演はベートーヴェン四重奏団によりレニングラードで行なわれ、1954年に死去した最初の妻ニーナ・ヴァルザルに捧げられた。

3つの楽章が休みなく演奏される。第1楽章アレグレットは展開部を欠いたソナタ形式。ベートーヴェンの「運命」交響曲に似た動機で開始される。この短い動機がスピッカートを用いるなどして、ある種の変奏のように多様に姿を変えていく。第2楽章レントでは、第2ヴァイオリンの伴奏に導かれて第1ヴァイオリンが陰鬱な歌をうたう。第3楽章アレグロ-アレグレッ

トでは、4つの楽器が荒れ狂う。ダウンボウで切断される旋律のなか、第1楽章の動機がところどころに顔を出す。息が詰まりそうなワルツを経て、祈りの言葉を呟くように静かに曲を結ぶ。

ショスタコーヴィチ:弦楽四重奏曲 第9番

1964年に完成し、同年、ベートーヴェン四重奏団によりモスクワで初演。1962年に再婚したイリーナ・スピーンスカヤに捧げられた。

間断なく演奏される5つの楽章からなる。ソナチネ形式の第1楽章モデラート・コン・モートは、いかにもショスタコーヴィチらしい第1ヴァイオリンの旋律で幕を開けるが、不安を隠すかのようにのびやかな音楽が展開する。第2楽章アダージョは前楽章の雰囲気そのままに、音楽が静謐さを増す。第3楽章アレグレットでは、一転してリズムミクな音楽が展開される。ロッシーニの「ウィリアム・テル序曲」、完成したばかりの映画『ハムレット』から自作の音楽、さらには弦楽四重奏曲第7番の「運命」動機などが顔をのぞかせる。第4楽章アダージョは三部形式。悲哀に満ちた歌が奏でられる。第5楽章アレグロはロンド・ソナタ形式で、これまでの楽章が総括される。道化じみたポーズで苦みきった音楽が疾走する。すべてを断ち切るような強烈なピツィカートのと、短い祈りの調べが現れ、音楽は再び走り始める。